

『人から人への交易 堀田正彦・民衆交易への挑戦』

堀田正彦著、オルター・トレード・ジャパン編
(亜紀書房、2022年)

本書は、オルター・トレード・ジャパン(ATJ)の創業者であった堀田正彦氏の遺稿集である。堀田正彦とはどんな人だったのだろう。どのように青年時代を過ごし、どのような出会いがあって民衆交易の世界に入ったのだろう。なぜATJという会社が必要だったのだろう。どのような構想のもとATJは設立されたのか。どのような試行錯誤があってこんにちのようなかたちで存在するようになったのか。

日本版フェアトレードのパイオニアであり老舗企業であるATJは、大きな期待と注目を集めてきた。と同時に、それに代えていくさまざまな社会的責務も負っている。壮大な試行錯誤を繰り返した創業者には、その自覚が強くあったことが本書を読むとよく分かる。

バラゴンバナナやコーヒーなどの民衆交易品を購買消費することの意味はどこにあるのか。企業の社会的役割とはなんだろうか。答えは簡単にはでない。しかし、過去に学ぼうとしない者こそが過去に最も囚われている者であるというパラドックスがある。だからこそ、過去を対象化することも必要だ。創業者について学ぶことの意味もそこにあるのだろう。

市橋秀夫(いちし・ひでお/APLA)

今月のTOPIC



特定非営利活動法人APLA (Alternative People's Linkage in Asia)
フィリピン・ネグロス島での30年以上の経験を活かし「農を軸にした地域づくり」のためのネットワークの構築を目指して、出会いや交流の場の創造を進めています。 www.apla.jp

株式会社オルター・トレード・ジャパン(ATJ)

バラゴンバナナやエコシュリンプなどの食べ物の交易で、生産者と消費者を顔と顔が見える関係でつなぎ、人と人、自然が共生できる社会づくりを目指しています。 <https://altertrade.jp>

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15サンライズ新宿3F
TEL03-5273-8160 FAX03-5273-8667 MAILinfo@apla.jp

過去のPtoP NEWSはこちらから

特定非営利活動法人APLA

人から人へ PtoP ピープル NEWS vol.51 2022.08

PtoP: 作る人と食べる人が共に支え合う仕組み



特集



ネグロス東州・ボナウォン村の生産者と現場スタッフたち

マスコバド糖製糖工場の若手のホープ

ライアン・ヘラルディーノさん

オルタートレード・フィリピン社 製糖工場マネージャー from フィリピン

バラゴンバナナとマスコバド糖を日本に輸出しているオルタートレード・フィリピン社(ATPI)で働くライアン・ヘラルディーノさんは、2017年に当時最年少で入社し、現在は製糖工場のマネージャーとして日々の製造の品質管理などを行っています。コロナ禍でなかなか現地に赴くことが難しいなか、今回はライアンさんにオンラインでインタビューをしました。

サトウキビの搬入からマスコバド糖になるまで、細かな管理が必要な仕事に、「一切の妥協なく行っている」とライアンさん。製糖工場のマネージャーになる前は工程管理に携わっており、その経験も活かして日々の製造目標に向けて取り組んでいます。工場では老若男女問わず様々な人がシフト制で働いていて、日々の業務をスムーズに進めていくには一人一人とのコミュニケーションは欠かせません。ライアンさんは現在26歳。工場や生産者には年上の方が多くいらっしゃいます。自分だったら緊張しちゃうかも、と思い年上の方とのコミュニケーションで大事なことを聞くと、「壁をつくらず、ありのままの自分で、心を開いて話すこと」とのこと。そうすると相手にも心を開いてもらいやすく、いい関係を築きやすくなるそうです。

休日は外出するより、家でゆったり家族との時間を過ごしているそうで、お母さんのつくるご飯を食べながら一家団らんのひと時を

大切にしています。彼もたまに料理をするそうで、マスコバド糖をスイーツだけではなく、調味料として使うこともあり、「テリヤキに使うと美味しいよ!」とおすすめしてくれました。他には、フィリピンでは定番の餅米スイーツのピコなども作るそうです。また、DAKILAという個人の社会的関心を高めるNGOに属しており、休日はその活動をすることもあります。

「日本の皆さんにマスコバド糖を使ってほしいし、手に取ってもらえると嬉しいです。マスコバド糖を使うということは、ただ単に売り上げになるということではなく、私たちATPIを通じてサトウキビ生産者一人一人の生活に繋がります。」と語るライアンさん。終始穏やかにインタビューを受けていた彼ですが、真剣な眼差しで日本の皆さんへのメッセージを伝えていました。今後の彼の活躍に期待です!

藤山美穂(ふじやま・みほ/ATJ)



特集



みんなの力を合わせて乗り越える ～台風オデットの被害を受けて～

from フィリピン

2021年12月16日から17日にかけてフィリピンを通過した大型台風22号(フィリピン名:オデット)により、バランゴンバナナ及びマスコバド糖の原料となるサトウキビの生産者たちは大きな被害を受けました。オルタートレード・フィリピン社(ATPI)*1社長のノルマ・ムガールさんに、被害を受けたネグロス島の復興状況を聞いてみました。

サトウキビ畑の状況

台風が通過した時期は、サトウキビの収穫シーズンが半分過ぎたくらいの頃でした。本来、サトウキビは強風に強い作物とされていますが、今回の台風ではたくさんの茎がなぎ倒されました。その影響で糖分含有量が減り、砂糖としての生産量が減ってしまうおそれがありました。台風後の天候がよく、サトウキビの回復がよかったため、心配したほどの影響はありませんでした。ただ、泥にまみれたり、強風で絡まりあったサトウキビを収穫するのは困難を要し、通常より収穫に時間や労力がかかりました。そのため、余計にかかった人手の労賃は、災害支援の募金から補填しました。



生産者からバナナの回復状況を聞くノルマ・ムガール社長(右)

まずはバナナ畑の復興を

台風の通過によりネグロス島の生産者たちのバナナは、ほとんどなぎ倒されてしまいました。今回の台風は今までになく最悪だったと生産者が口々に言っていました。どれだけ民衆交易のバランゴンバナナが生産者たちの暮らしを支える基盤だったのかを痛感しました。まずはバランゴンバナナを復興させることが生産者たちにとって最優先です。

それを実現するために、生産者たちに肥料(鶏糞)を配布し、散布してもらうことにしました。これまで施肥は限られた地域でのみ実施してきましたが、今回は村の中の橋が壊れたり、道路状況が悪かったりするために肥料を運搬できない地域を除いて全産地に配布しました。今年は乾季にも雨が降り、バナナの育成にとって好条件だったことも手伝って、葉っぱが元気で実の成長が早くなり、施肥の効果を多くの生産者が認識しました。

結の精神で

一時的に仕事がなくなってしまったバナナの買付や運搬を担う現場スタッフ、バナナの箱詰めをするパッキングセンターで働くパッカーたちも、生産者の畑に出向いて一緒に作業を実施してもらうことにしました。フィリピンには「バヤニハン」という、共同体での助け合い、相互扶助の制度*2がありますが、それをバナナの復興においても意識的に実施したのです。現場スタッフには対価として日当を支払いました。

現場スタッフの中には生産者である人もいますが、雇用されて働いている人も多くいます。これまでは単にバナナを買い付けたり運搬したりすることが主で、生産者のことについて知る機会がほとんどない人もいました。今回生産者たちの畑に行くことにより、バナナが作られる背景や生産者のことを知るきっかけになりました。生産者や畑のことを知ることで、それが自分たちの仕事とつながっているという意識を持ってほしいし、これからもその意識を高めていかなければなりません。今回の台風被害は甚大だったものの、施肥や「バヤニハン」の実践はバランゴンバナナの生産者や現場スタッフの意識改革を促したとも言えます。施肥の効果もあり、バナナの回復が1~2ヵ月早まっており、9月頃から前年の平均出荷量程度に回復する予定です。



普段はパッキングセンターでバナナの箱詰めをするスタッフたちも畑で作業

今回の台風からの復興は、日本の皆さんからのご支援がなければ、すべての被災地へ手を差し伸べることはできませんでした。日本からの応援によって生産者たちも復興に向けて、また歩みだすことができました。すべての関係者が感謝と希望、目的をもって懸命に前に進もうとしたこの復興事業は、民衆交易の歴史の中に刻み込まれることでしょう。

*1 オルタートレード・フィリピン社:バランゴンバナナ、マスコバド糖の輸出を担っている。

*2 日本の農村社会にある「結(ゆい)」に相当。